鷗外大人の思出

馬場孤蝶

鷗外大人の思出

故森鷗外大人（うし）の発病が何時（いつ）時分であったか、一向知らなかった私どもに取っては、大人の遠逝（えんせい）の報を得た時には甚だ以て意外な感がした。あの何時見ても年寄染（としよりじ）みたところの無い、率直な、勢の好かった大人がもう亡き人であるとは、全く夢のような心持がする。

名高い、えらい人と親しくなる機会を持ち得無い私は、鷗外大人に拝面したことも矢張り度々とは云い得無い。一々数えては見無いが、全体で十回位なものであろうと思う。

故大人の謦咳（けいがい）にはじめて接したのは、与謝野君の千駄ヶ谷のお宅で催された前期の『明星』の懇和会に於てであった。それは明治三十八年の秋頃でもあったろうかと思う。

『しがらみ草紙』以来、論陣を張っては、如何なる小敵をも看過し無い辛辣な論鋒を進められる鷗外漁史（ぎょし）は、定めし人としても、強い鋭い人という感じを与えるのであろうと思って居たのに、実際の鷗外大人が如何にも柔かな暖かな、率直な人であったのは、私に取っては全く意外であった。

その時は私は少し後(おく)れて行ったのかと思うのだが、鷗外大人の話されたことを今は余り記憶していない。

唯蒲原君であったかと思うのだが、私が読書好きであるということを鷗外大人に話すというと、大人は、如何にも快さそうに頷いてから、

「しかし、余り多読するのも善し悪しで、これも結構だ、これも又面白いというようになって、趣味の中心を失う虞(おそれ)がある」

というような意味のことを云われた。それから続いて、大人は独逸の象徴詩の話を始められて、

「余程不思議なものだ。剣を抜いてじっと見て居ると、それが忽ち女になるというようなのなどもある」

と、いうようなことも話されたように記憶する。

夜になって、話が大分はずんで来た時分であったと思うのだが、私が、

「此度の戦争は実際日本が勝ったのですか」

と、聞くと、大人は、

「いや、大変なことを聞くじゃァ無いか」

と、身じろぎするような身振りをして、快さそうに笑われてから、可なり真面目な顔になって、

「兎に角、世間でいうような訳のもので無いだろうと思う。奉天の戦の時などは、陸軍の公報では『敵は潰乱(かいらん)せり』というのであったが、私はそうは思わ無かった。露軍は十分に退却の用意を整えて居たことは明かであったんだ」

と、云われた。

それから、金州城の攻囲の際にも、日本軍には砲撃の準備が不十分であったが為めに、殆んど苦戦であったことを話され、

「城を陥(おとし)れてみて、始めて防備の完全であったことが

分って、日本軍の砲撃の効の無かった訳が明かになったのだ」

と云われ、それから尚進んで、日本軍が有効な砲弾をば如何にして得たかということの説明を吾々に与えられた。

私が新聞の従軍記事なるものが、何(いず)れも此れも千遍一律の観があって、陳套(ちんとう)を脱し得無いことを笑うというと、大人も顔を顰(しか)めて、

「いや、実に馬鹿な話で、彼等は実際にはさまざま特徴のある事を見るのだが、それを筆に上(のぼ)すことになると、

忽ち陳言套語の行列になって了うのだ。例えば、満洲では、気候が寒いのだから、土がすっかり凍って了って、ぼろぼろになって、それが河の氷上などには、黒く吹き寄せられていて氷が見えぬ位になって居る。一望皚々たる眺などというのはウソである。遼河の氷上などが矢張り黒土の吹き溜りであるんだ。所が、それが新聞の従軍記事では、全軍白雪を蹴立てて突進したとなって居る。何処へ行ったって、黒い白雪というのがあるものか」

というように答えられた。

その夜の帰りは、大人も吾々も一緒であった。千駄ヶ

谷の停車場までの路は可なり悪かった。剣の柄を取って、地に着かぬように引き上げて、足場をよって、吾々と言葉をかわしながら歩いて来られた大人の穏かな体容が今も尚私の眼前にある心地がする。

大人は全く率直な人であった。後進に対しては城壁を置くというようなところは少しも無いように見受けられた。殊に後進の秀才に対しては、自ら進んで親しくされたように伝え聞いて居る。

故上田敏君などには、ひどく信頼して居られたように聞いて居る。

日本文学電子図書館

鷗外大人の思出

著　者：馬場孤蝶
制作者：宮澤一郎
底　本：「明治文壇の人々」、
ウェッジ文庫版
2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館